

庄野英二全集

11

庄野英二全集

11

偕成社



庄野英二全集 第十一卷

印刷 昭和五十五年二月二十五日

発行 昭和五十五年三月十日

著者 庄野英二 しやうの えいじ

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

〒一六二 振替 東京五一―一三五二番
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三の五

電話 東京(〇三)二六〇―三二二一(代)

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

定価 二五〇〇円

乱丁本・落丁本はおとりかえいたしません。

庄野英二全集 第十一卷

装幀 カット
装幀 協力

山 高 登
庄 野 英 二

目次

愛のくさり……………9

一枚のはがき

11

プロ人間

15

ああ武士道

19

「父の日」に思う

23

父の手紙

26

父の居眠りいねむり

27

わが家のコッテイジ

29

海 図

34

辞 書

38

ある船の一生

42

串本の海くしもと

51

パリのスズメ

59

野鳥のくる庭

62

私の鳥籠	64
蹄鉄	90
牛の鈴	93
ナンテン	95
タラの芽	99
木苺	101
バグダアドの紅茶	103
雑煮	105
ライスカレーの思い出	107
六方焼	110
庭の千草	113
みかんの花	130
ロビンソン・クルーソーとお化けの世界	138
子どもに読む習慣を	144
坪田ナミ子さんのこと	148

赤道の旅

春山跋涉はるやまぼつしやう

屋根材について ノオト

アカルバハール

シーナイフ

マラツカ

シャカウ

狸たぬきのため糞ぐそ

ハマウリの日

赤道の旅

ネギマ

スウェーデンの鉄鍋てつなべ

虹にじ

雪の中の小屋

マーシー・マリーゴールド

桑の葉

門出

風船

フグのヒレ

沖君

アルバム

心に残った先生

「びわの実学校」

ひょうたんの酒

殉情詩人

空想植物園

270

273

276

279

282

285

295

354

358

361

363

367

講演「文学の周辺」

413

年

譜

433

あとがき	454
庄野英二全集 第十一卷 解題	456
戸塚 恵三	460
前川 康男	460
庄野英二覚え書	460

愛のくさり



一枚のはがき

今は町名改正で、神山町になっていますが、——私の亡父の郷里は、徳島県名西郡上分上山村という剣山に近い山村でありました。

私の家族は、大阪に住んでいましたが、叔父や叔母たちは上山に住んでいました。

私は学生時代のある夏、二人の友人を誘って剣山登山を計画しました。

大阪から船で小松島に渡り、汽車で徳島へ出て、後は乗り物も利用しない、宿屋にも泊まらないキャンプだけという計画でありました。

三人のリュックサックは、キャンプ用具と食糧その他で、とほうもなく重たくなってしまいました。リュックサックをかつぐと、肩の前あたりの筋肉が圧迫され、しびれて血液の流れもとまってしまいました。リュックサックをかついで立っているだけでも苦痛でした。そこでリュックサックの荷物を取りだして、両手でさげるように荷作りをいたしました。

とにかく大阪を出発し、徳島までたどりつくことができました。そして第一日めは、どうやらこうやら鮎喰川に沿って、かたつむりのようにノロノロと歩きました。

予定よりもはるかに手前で、最初のキャンプを張ることにしました。

第一日の行程から考えてみると、上山村に到着するまでに、何日かかるか想像もつきません。

三人は相談した結果、私の叔父おじの家のある上山までは、歩くのをやめてバスに乗ることにしてしまいました。

翌朝、バスで楽々と上山まで行ってしまいました。

上山村といってもじつに広いのです。バスは上山村の川又かわまたという字で終点です。叔父の家は中津なかつという字にあるのです。

川又から中津まで六キロほどありました。

三人はしかたなしに、重いリュックにあえぎながら歩いて、叔父の家にたどりつきました。

叔父の家では、甥おこが友だちをつれて、はるばるやってきたというので、大歓迎してくれました。ニワトリをつぶすやら、ウナギを焼くやら、下へも置かぬもてなしです。友人がキャンプを張るといっても承知しません。

座敷ざしきにふとんを敷しいて、蚊帳かやをつつてくれました。毎日、おはぎやすしを作ってくれたり、田舎いなかながらせいっぱいのごちそうをしてくれました。

私たちはよい気持ちで三日間を過ごしました。

それから、三人は剣山つるぎさん登山を決行しました。荷物は整理して軽くしてしまいました。

出発の朝、叔父は三人の荷物を一つにまとめて、つぎの村の峠とうげの上まで汗あせだくで運んでくれました。いくら荷物の整理をしてあっても、三人の荷物をいっしょにすると、相当な重量でありました。

三人はまったく恐縮してしまいました。若い学生が、自分の荷物を年上の人にかついでいてくれるのです。ところが叔父は、

「君たちは、これから行程も長いのだし、剣山に登らなければいけないのだ、ちょっとでも力をセーブしておきたまえ。」

といってくれるのです。そして、いくらいても荷物をかつがしてくれませんか。

やっと隣村の峠の上で、三人は荷物をめいめいがかつぎ、叔父と手を振って別れました。

そのときの登山は、三人のたのしい思い出となりました。

私たち三人が、無事に帰って、そして二週間も三週間もたってからのことでした。

叔父から、父にはがきがきました。

こんな意味のことがかんとんに書かれてありました。

——過日は、甥とその二人の友人がきてわが家一同は大喜びであった。田舎のことで、大したもんでもできなかったが、みんなとても喜んでくれていた様子である。

出発の朝、三人の荷物を隣村の峠まで運んだが、力自慢の私にとっても大仕事であった。

しかし、それはともかく、家内や子どもたちも、三人からのその後の便りを待っているが、一枚のはがきもこない。お礼状を催促するつもりではないが、このごろの若い者は呑気なものだ——。

私はそのはがきを父から見せつけられて、汗顔赤面してしまいました。

私は、自分が、はがき一枚だしていいことを棚にあげて、なぜ二人の友人が、お礼状をだしてくれなかったのかと恨む気持ちにさえなっていました。

叔父は、自分の兄にだす便りですから、遠慮気がねもなく、あっさり書いているのです。別段、甥やその友人を恨みがましく思っているわけではありません。

けれども、私は誠心をもって私たちをもてなしてくれた、叔父家族の心を傷つけたことが、深く悔やまれてなりませんでした。

何年かたって私も父親になつてから、私は自分の子どもには、事あるごとに「お礼状を忘れるな」と厳しくしつけています。

しかし、自分の学生のとときの失敗はまだ子どもに話したことはありません。かくしていたわけではないですが、この原稿を書くまで忘れてしまっていたのです。

荷物がかついでくれた叔父も三年前の秋の終わりに死んでしまいました。